

## 「戦争体験」の語り継ぎ——自分史作品の分析から<sup>1)</sup>

塚 田 守\*

Told Stories of “War Experiences” in Autobiographic Writings

Mamoru TSUKADA

### はじめに

本稿は自分史的作品を分析することにより、なぜ、そして、どのように「戦争体験」が語り継がれているかについて論じようとするものである。庶民の「語り」の一つの表現方法である自分史作品の分析を行うプロセスで共有されたテーマとして、「戦争体験」についての記述が多く見られた。「自分史を書くこと」の社会学的研究をした小林（1997年）によると、より若い層の自分史作品が「ふりかえる」「整理する」という言葉でまとめられるもので、自分史を自己に直面するものとし、自己意識の関連した動機であるのに対して、自分史を書く年配の人々は、「記録を残す、体験を伝える」ことを目的として自分史を書く傾向がある。その記録としてテーマになるのが「戦争体験」であることが多い。北九州自分史文学賞の応募者と作品分析のデータによると、「戦争体験」は家族史（親子・夫婦など）に次ぐテーマであり、特に、何らかの「戦争体験」を持つ可能性の高い年齢層では、その傾向が強いという（吉澤：1995年）。本稿は「語り」としての自分史作品を読み、戦後世相史の一側面としての「戦争体験」の語り継ぎを社会学的に分析することを目的としている。

### 1. 「戦争体験」の意味をめぐる

野上（2006年、2008年）は、歴史社会学の視点から、「戦争体験」の意味がアジア太平洋戦争までの兵士の「戦闘体験」としての「戦争体験」と戦後から現在にいたる「戦争体験」へと歴史的に変化していると論じ、私たちの「戦争体験」観は「兵士の戦争体験」と「市民の戦争体験」を何の葛藤もなしに併置してしまっている、と警鐘を鳴らしている。そして、「戦争体験」の変容を歴史社会的に分析することの必要性を主張している。

「戦争体験」のそのような歴史社会学的研究の意義を十分理解した上で、野上の分類上、

---

1) 本稿は平成17年度～平成19年度科学研究補助金（基盤研究(C)）による研究成果の一部である。（課題番号17530396）

---

\* 国際コミュニケーション学部 国際言語コミュニケーション学科

戦後に語られる「戦争体験」の中で、「空襲」「疎開」「暮らし」「引揚げ」などのテーマは、「戦争体験」として重要であると考えられる。特に、「戦闘体験」を持つ元兵士が少なくなり、直接的に「語り」として、「読み」「聞く」ことができる次の世代として、「空襲体験」や「引揚げ体験」を持つ人たちを対象とした研究は、「戦争体験」を語り継ぐひとつの方法として重要な意味を持つのではないかと考え、本稿では子ども時代に「空襲体験」「引揚げ体験」をした人々の「戦争体験」を取り扱っている。

2001年に「戦争体験」を募集し出版する企画に関わった早乙女（2005年）は、その投稿数の多さに驚き、子ども時代に「戦争体験」をしたことが今も意味ある記憶として、人々に影響しているのではないかという印象を持ったという。2001年「忘れないあのこと、戦争」編集会が募集したら、全国から1559編の応募があった。この企画が戦後56年を経て行われたことで、野上のいう直接戦闘にかかわった「戦争体験」は少なく、「銃後の体験」が多くしめていた。応募した人は、2011年段階で65歳から75歳が頂点で、10歳代で戦争を体験した世代であった。20年前に同種の企画をやった時にも、応募者の年齢構成が45歳から55歳が最多であった。この世代こそ、10歳代という「精神形成期に戦争からもっとも深刻な影響を受けた世代なのである」と、10歳代での戦争の影響の深刻さについて早乙女は述べている。10歳代で何らかの「戦争体験」を持ったものは、その影響を人生の後まで受ける傾向がある。そのような10歳代の「戦争体験」を語り継ぎ、自分の子ども、孫たちに伝えたいと思っている人々がいま70歳代後半である。その人たちが自分史の中で語る「戦争体験」を分析し、今後も「戦争体験」が語り継がれる意味について考察する。

## 2. 東京大空襲を語り継ぐ——早乙女勝元さんの運動

本節では、「戦争体験」を語り継ぐ運動を続けている一人の作家に焦点を当てる。早乙女勝元さんは13歳の時に東京大空襲に出会い、友達などを亡くす強烈な体験をした。その後、18歳でその体験を含む14歳までの「生い立ちの記」の処女作『下町の故郷』を出版した。早乙女さんは、その中で劣等感と貧困にさいなまれた日々と強烈に経験した「戦争体験」を書いた。その後、自分の取り巻く生活を題材として小説を書き続け、38歳の時にベストセラーになった『東京大空襲——昭和20年3月10日の記録——』という東京大空襲体験者の聞き取りをベースにしたドキュメンタリーを書くに至った。その時「東京空襲を記録する会」を発足させて、東京大空襲の語り部としてのライフワークに入った。その後、戦争に巻き込まれた世界の子どもの体験を取材し、ドキュメンタリー作品を書きながら、戦争の悲惨さを訴え、「戦争体験を語り継ぐ」運動を続け、現在、「東京大空襲・戦災資料センター」の館長になっている。

東京大空襲の語り継いでいる早乙女さんの著作が中心に分析し論じようとすることは、野上元のいう兵士による積極的な「戦争体験」ではなく、空襲に遭ったという受動的な「戦争体験」である。このような受動的な「戦争体験」は、日本の戦争責任を問うなどという政治的な議論ではないが、太平洋戦争という歴史に巻き込まれ、そこで生きた人々の語り継ぐべき「戦争体験」である。また、このような受動的な「戦争体験」は、10歳代という精神形成期に受けたものとして、のちの人生に大きく影響を与える「事件」として、今も人々の心の中に生きていられると考えられる。

本節の中心的課題は、10歳代に「戦争体験」をした一人の作家が、その「戦争体験」をどのように書き(語り)、その体験とともにどのように生きているかを考察するものである。

### 『下町の故郷』はどのように書かれたか

早乙女さんはどのような契機で『下町の故郷』が書くようになったのだろうか。『下町の故郷』のあとがきにある「てのひら自叙伝」を手がかりとして、そのきっかけについて考察する。

そのきっかけは、山本茂美という人物との偶然の出会いであった。早乙女さんが勤めていた新聞が、季刊「葦」の広告を掲載した際に、決定的な誤植をしたので、その謝罪のために、雑誌「葦」の編集部に行った。そこで、当時の編集長だった山本茂美に出会った。早乙女さんは、山本の「熱烈なロマン」にひかれ、スカウトされた格好で、雑誌「葦」の編集部で働くことになった。

「葦」の読者は、働く娘たちが多く、「葦」は特に、紡績工場の娘たちに人気がある雑誌であった。山本と早乙女さんは、彼女たちの生い立ちに耳を傾け、文章を書くようにすすめた。山本が後に『あゝ野麦峠』を書いたが、その時の聞き取りがベースになっているのではないかと、早乙女さんはふり返る。編集部には、野間宏や亀井勝一郎など当時活躍中の作家もぶらりと立ち寄り、雑談をしていくこともあった。そのような雑談を聞きながら、早乙女さんも自分の中にも「ロマン」をふくらませていった。「なんとかモノになるかもしれない。私は、ついその気になった」と早乙女さんはふり返る。その気になった後、「少年時代の貧しさとかなしみと劣等感の底にあるものをえぐるようにして」100枚ほど書いた。その後も2回続きで掲載し、「つぎは単行本だ、ともう一度書きなおしてデッカイものにしろ」と山本に言われ、300枚近い原稿がまとまり、山本からタイトルの修正を受け、『下町の故郷』として出版した。早乙女さんは自らは『下町の故郷』を書くつもりもなかったし、書けるとも思っていなかったが、たまたま出会った「葦」の編集長の山本茂実が書くようにすすめた結果、この本が生まれたことになる。

もちろん、「書け、書け」と言われたから書いたのであるが、書きたいことが何もないければ、書けなかったかもしれない。18歳で生い立ちの処女作を書くことができたのは、何かを伝えたい、書きたいというものがあったからである。

### 『下町の故郷』を書いた動機

終戦直後不安を抱き、その不安の解消する手段として仲間を作りたいと思い書いた、と早乙女さんはいう。「物情騒然。世の中のありさまが、日々こんなに激しく移り変っては、だれだって不安になります。自分たちの明日がどうなるか、職場が、社会が、いつどんなふうに変動するのか、先のことはほとんどわかりません」と書き、終戦直後の不安の想いを書き出しとしている。そのような状況の中で、「まさかというとき、そのとき、たよりになるのは、やっぱり人間なのだ、と思います」と書き、「……心の友を一人ふやし二人ふやし、そうして声をつなげ、心と心とをむすんでいったら、切ってもきれない人間関係が生まれるでしょう。これがいわゆる“仲間”というものなのです」と書き続け、仲間を作ることの必要性を強調する。そして、そのような仲間をふやすために、「まず、自分が思いきって裸になること。心のおくをきりひらいて、悩みや不安、怒りや喜びを、そっくり相手に

伝えることです」と言い、「少年の日、非常に孤独だった僕は、そういう仲間がほしいと痛切に思いつづけ、勇気をもって、自分のなにもかもいっさいをさらけだしてみました。絶対に口外しないできた自分の恥まで、胸のかさぶたをひきはがす思いまで書きつらねました」と、「ぼくの生いたちの記」として書いたと、『下町の故郷』の「はじめに」に書き記している。

### 戦争の犠牲者たちへの追悼の「想い」を伝えたい

戦争の犠牲となった仲間への思いもまた、このような作品を書いた動機であった。夜間高校の復員軍人の K、入学時級長だった草履下駄の名物男が、自死してはたたのである。K の自殺まで追いつめた原因について考え、戦後働きながら通った夜間高校の K への追悼として書きたいと思った。自死した K についての「想い」について書きながら、K を死に至らしめたのは、戦争であると感じ、その K が体験したことは、早乙女さん世代が経験した「共通の体験」であったのではないかと考えた。そして、そのようなつらい経験をせざるを得なかった原因は戦争にあるとし、戦争を告発するノートを書き始めた。「K を自死まで追い詰めたものの正体はなにか」とノートに綴りながら考え、一つの答えにたどり着いた。

そうだ。戦争は、K からふるさとの家を奪い、両親と弟の命を奪っただけではまだ足りず、次に妹と、さらには K 自身の命まで無残にも容赦なく、あの世に追いやったのだ。私は、K の分まで学ばなければならないし、そうしなければいけないのだと思った。……なにを学ぶか。まだ終らぬ戦争の、その息の根をとめなければ！

戦争が民衆にとってどのようなものであったかということは、3月10日、東京大空襲の火焰地獄を生きのびた自分の身体が、痛いほど知っている。私は戦争のもたらす結果を証言できる一人なのだ（2004年：175頁）。

とノートに書くことによって、早乙女さんは、友の死を嘆き哀しむ中で、自分がやるべきことを模索する。そして、この時点で、「戦争の息の根」を止める役割を自分に課すことになる。その時は、早乙女さんが「戦争体験」を語り継ぐ証言者としての「当事者性」を獲得した時であった。そして、「戦争体験」を語り継ぐ行為はまた、死者への追悼の意味とともに、死者とともに生きる「想い」として早乙女さんの中に位置づけられていく。

### 東京大空襲を語り継ぐ運動へ

処女作である『下町の故郷』は直木賞に推薦されるほどの反響があった。しかし、貧しかった頃の生活、大空襲で被害を受けたことに直面し、書くことで、自己変革しようと思った早乙女さんの「想い」は、必ずしも、当時の一般的な人々の「想い」ではなかったようである。終戦直後の人々は「みじめな」過去をふり返えることを望まず、今を生きるのが精一杯であった。

当時あこがれていた S 子にその本の内容を拒否され、失恋した早乙女さんはえたいの知れない不安に襲われるようになった。自分がきちんと勉強せずに書いた処女作は、一種の生い立ちの記録でしかないと自覚し、もっとしっかりと大地に足をつけた生き方をすべき

だと考え、2年ほど働いた「葦」の編集部をやめ、工場で働くことに戻った。第1の職場の鉄工場では、長時間労働で自由のない生活に疑問を感じ、辞めた。そして、その時の体験をノートにまとめ、小説の題材を考えていたようだった。

第2の職場は、ハーモニカ製作工場だった。工場で働きながら、人々の会話をメモする生活をした。そして、その年に戦時中にK鉄工場へ動員された時の友人“ノッポ”からの手紙を受け取り、戦時中に「共通体験」をしたことを書くことへの意欲が駆りたてられたと書いている。そして、3年間働いた後勤めたのは、出版社の返本整理を主にする倉庫番であった。倉庫番をしながら、第2作目の『ハーモニカ工場』、第3作目の『美しい橋』を出版した。しかし、労働争議の中で退職し、その後は、職に就かず作家活動に入った。

その作家活動の中で、早乙女さんは職場についての記録運動をするのではなく、東京大空襲の体験者からの聞き取りに基づいたドキュメンタリー作品、『東京大空襲』を岩波新書として出版し、ベストセラーを生み出した。このドキュメンタリーを書く前にはフィクションを書く中で不安を持ち始めていた。その当時のことを対談でふり返って、次のようにいう。

どんどんフィクションを積み上げていったのですが、積木細工じゃないけど、土台がぐらぐら揺れてきて、ますます真実から離れていくような不安がありましてね。書けば書くほどストーリーに流されそうな不安と危惧がやみがたく、それでまたノンフィクションに戻ったのです。そして、『東京大空襲』から記録文学の時間が十年以上つづいて、いまでもその延長線上にあるんですけど、今度はあらためて記録文学のもつさまざまな意味合いと迫力とを再構築して、新しいロマンにせまらなくちゃと考え始めたんです（1989年：98頁）。

『東京大空襲』を書くための聞き取りに応じてくれた人々は、取材を受けなければ、自らの「戦争体験」について話したいとも思っていなかった。早乙女さんが訪問し、「戦争体験」について話してくれるように依頼しても、「そんなこと、ひとに話したって、どうにもなりませんから」と言い、かたく口をつぐんだ人が多くいた。その中に、自分から「戦争体験」とその後の体験という傷口をひらいて語ろうとする人たちがいた。しかし、その人たちも、そのようなことは、「とてもつらくて……」書けないし、あらためて人にしゃべったこともないというほどに、東京大空襲から「敗戦をはさんで戦後へつづく道のりは、ことばや文字で表現できぬほど、きびしく長かっただろう」（2007年：219頁）。そのような勇気ある人々にとっては、「3月10日を語ること、戦争の悲惨さを伝達することをもって、生き残った人間の最小限度の義務」と思っているのではないかと考え、1977年、戦後25年目にし、東京大空襲の実態を後世に語り継ぐ運動をスタートさせている（2007年：215-228頁）。

このドキュメンタリー作品を境に、海外にも取材に行つて、子どもたちの「戦争体験」について書きながら、平和運動家として「戦争体験」の語り継ぎの運動を続けている。この頃を契機にNHKのローカル番組でカメラレポートなどしながら、戦争と下町を題材として取り扱った。そして、自らの東京大空襲での体験をベースにして、戦争当時に子どもだった人々の取材を通して、戦争と子どもを題材として編集し出版している。この時期になると、日本の子どもだけではなく、ポーランド、ドイツ、ロシア・ベラルーシの戦跡



を訪れ、取材を重ねた。さらに、中国、韓国、ベトナムの戦跡を訪ね取材し、2003年に『戦争と子どもたち』を出版し、日本の子どもたちだけでなく、世界の子どもたちと戦争の関係についてのドキュメンタリー作品に精力的に取り組んだ。

また、「戦争体験」を語り継ぐドキュメンタリー作品を平和運動の一環として続けている。戦後50年の歳月が流れ、「戦後」という文字さえマスコミから消えてしまったことに危機を持ち、「戦争体験」を語り継ぐことの重要性を認識し、日本だけでなく海外の女性たちの経験をまとめた『戦争を語りつぐ——女たちの証言——』を1998年に出版した。戦争によるもっとも過酷で悲痛な体験が一般市民のなかでも、特に女性や子どもたち、社会的弱者に集中していることを踏まえ、内外の女性15名の戦争体験の証言を取材に基づき、ドキュメンタリーとして掲載する形をとった本として出版した。

早乙女さんはまた、「戦争体験」を語りつぐ活動の一環として、「戦争体験」を募集する企画などにも積極的に活動している。そして、さまざまな場で、「戦争体験」を書く人に対して、励ましと支援をしている。森川寿美子・早乙女勝元『東京大空襲60年 母の記録 敦子よ涼子よ輝一よ』（2005年）は早乙女さんとの共同作品であるといえる。東京都の援助の下、『東京大空襲・戦災誌』（全5巻）を編纂した時に、森川さんが投稿されたものを読み、その後、新しく書かれたものを追加して、この本として出版している。

### 3. ベストセラーを書いた母親たち

#### 3.1 『ガラスのうさぎ』の高木敏子さん

『ガラスのうさぎ』でベストセラーを書いた高木敏子さんも「戦争体験」を語り継ぐ運動を展開している人物として知られている。『ガラスのうさぎ』は今も読み継がれている「戦争体験」の児童書である。12歳、小学6年生の女子児童の視点から、戦争の悲惨さを描写した感動的な本である。神奈川県の大宮の町に疎開しているうちに、3月10日の東京大空襲で二人の妹と母親を失った。そして敗戦のわずか10日前に、父親と一緒に疎開先の二宮駅で列車を待っていたところ、急降下してきたP51戦闘機の機銃掃射で、父親が殺されてしまった。一人残された12歳の高木さんは泣いているゆとりもなく、血まみれの遺体を知人の家へと運び、火葬のために薪をあつめて、お骨にしなくてはならなかった。その後、死んだ父親の田舎に引き取られて、厳しい生活を体験する。『ガラスのうさぎ』は、12歳の少女がそのような戦争の非情さと残酷さを体験しながらも、けなげに生きるというストーリーである。

この本の草稿の元になったものは戦後17年後に書かれたが、実際に出版されたのは、両親と妹たちの33回忌に当たる32年後であった。この本は、出版と同時にベストセラーになり、映画やテレビ・ドラマ（NHK）にもなるほどの反響を起こした。その後、本に書いた「戦争体験」についての講演を依頼されることになり、1000回以上の講演を行い、「戦争体験」の語り部として活躍してきている。その間に『ガラスのうさぎ』後の自分の心の軌跡を『めぐりあい』（2000年）や『ラストメッセージ』（2007年）などのエッセイとして書き、平和へのメッセージを送り続けている。

この本が書かれるようになったいきさつや高木さんの「想い」を考察し、「戦争体験」を

語り継ぐことの意味について論じる。

### 戦後 17 年目に書かれた戦争体験

75 歳になった高木さんは、『ラストメッセージ―ガラスのうさぎとともに生きて』（2007 年）の中で、『ガラスのうさぎ』を書くようになるまでのいきさつ、出版してからの人々との出会いについて詳しくエッセイとして書いている。この『ラストメッセージ』を読みながら、『ガラスのうさぎ』が生まれるまでの過程をみていきたい。

1953 年（昭和 28 年）成人式の日、両親と二人の妹が眠る墓を参った時に、塔婆に書かれた「戦災横死」という言葉を見つけ、「もし結婚して子どもが生まれたら、あの、非道な、そして非情な戦争体験をしっかりと語り伝えていこうと決心しました」と、結婚もしていない高木さんが、成人の日の決心をふり返り記している。「戦災横死」という言葉を知り、親たちが「志なかばにして命を断ち切られた」のだという「想い」がつのり、亡くなった親たちの「遺志」を継ぎたいと思うと同時に、20 歳の高木さんは、「戦争体験」を「当事者」でない人々には理解されないものだと思って、思い出すのも嫌だと思っていた。また、早乙女さんが取材した人々と同じように、「戦争体験」は「思い出すのも嫌」「泣き言を言っていると思われるのも嫌」と思い、せめて、まだ見ぬ子どもたちに、「戦争体験」を語り継ごうとする決心をするだけだった。それから、ほんとうに親しい人、おたがいに気心が知れた人だけに、自らの「戦争体験」の話はすることがあっても、墓参りに行く時以外は、過去の悲しい思い出を考えることはなく過ごしていた（2000 年：46 頁）。

それから 10 年後、ひとつのテレビ番組が「戦争体験」を文章にするきっかけになった。その時の気持ちを『もういや「お国のために」には』に書いている。

そんな私が、後からハンマーかなにかで、いきなりガンとやられたようなショックを受けたのは、一九六二年（昭和三十七）年の二月のある午後のことでした。三歳の娘に本をよんでやっていたのです。そのとき、テレビの画面から呼びかける女の人の声に、ふとその方を見ました。

「戦争が終わって一七年の月日がたちました。世の中は、すこしずつ生活も楽しくゆたかになってまいりました。そこで忘れてはいけないのが、あの太平洋戦争です。いまなら語れる、書けるとおもいます。ぜひ、みなさんの戦争体験を書いて送ってください。……戦死、戦病死、戦災死、そして、あの戦後の混乱期に亡くなった人たち。この人たちは、もう自分たちの無念な死について語ることも叫ぶこともできないのです。生き残させてもらっている私たちが証言し、語っていかなければ、——。書くことはたいへんなことだけれど、やっぱり書きのこさなければならぬと、ささやかな決意をしたのでした（2001 年：47-48 頁）。

「生き残させてもらっている私たちが証言し、語っていかなければ」という決意をした時は、残されたものの使命、亡くなった人たちの「遺志」を継ぐ役割を自分に課した瞬間であった。

「戦災横死」した人々の声をいつか伝えたいと思ったのが、成人の日のことであった。それから、母親になり、伝えたいと思っていた子どもにも恵まれ、書きたいと思いペンを持っ

た高木さんであった。一般的に文章を書くということは、ある出来事についての記憶を蘇らせる作業であり、その出来事に関わる人々やその時の自分の感情を掘り起こすことである。高木さんも、書き始めてその時の悲しさや無念さを母親となった29歳の大人として、思い出すことになる。それは、単に、12歳の子どものころの自分に戻って思い出すだけでなく、その後生きてきた人生の経験を思い起こし、さまざまな感情に圧倒され、ペンが進まなかったことであろう。

しかし、テレビの呼びかけの「ショック」はその悲しみや無念さを越えてまで、高木さんに文章を書かせた。あるいは、長い間忘れることができない「想い」を一気に文章にしまったのかもしれない。そして、ついに書くことができた。その原稿が入選し、テレビで選者の無着成恭、佐藤忠男、小田実三名とのテレビでの座談会で、テレビ初出演をした。番組終了後、佐藤、小田両氏が、高木さんの肩をたたきながら、一言いつてくれた。その時の会話。

「高木さんの原稿、十枚ではとっても書き切れないよね。一行一行の行間に、まだまだたくさん書き残した部分が含まれている。これは大切な証言なのだから、いつの日か一冊の本にまとめなさいよ。あなたにはその責任があるのだよ。がんばって書きなさいよ」

「はい！ いつの日かかならず書き上げます」  
と、とっさに言っていってしまいました（2001年：50頁）。

成人の日には、「思い出すのも嫌、泣き言を言っていると思われるのも嫌。体験の無い人にくら言っても分かってもらえない、自分がはじめになるだけだと思い込んでいました」という「戦争体験」を10枚の原稿用紙に書き、テレビ局に送ったら入選し、選者である有名な評論家たちから賞賛のことばを受けた。「体験の無い人」にはわかってもらえないと思っていた気持ちが吹っ飛んだに違いない。さらに、一冊の本としてまとめることが「責任」とさえ言われ、高木さんは、自分の子どもたちにいつか伝えたいという「想い」以上のものを持った。

ここで選者になっていたうち、無着成恭は『山びこ学校』を1951年に出版していた。無着は、教えていた中学生に自分の具体的な暮らしの問題を「自己をふくむ集団」の問題として一緒に考え、解決しようと努力した「生活綴り方運動」を実践してきた人物である。「戦争体験」を文章に綴ることで、その社会的問題の解決への糸口を見出そうと考え、テレビ局のこのような企画に賛同し選者として参加していたのではないだろうか。また、もう一人の選者である小田実は、ベトナム反戦の市民運動である「ベ平連」を組織した人物である。この2人がいたからこそ、このような企画が持ち上がり、高木さんの投稿も選ばれたという経緯があったのではないかのではないだろうか。「何かを書こう」と思ってもそのきっかけがなければ、書くことができないのが一般的であるが、1960年代のこの時期にこそ、このような企画が生まれ、このような3人の選者に、高木さんの原稿が評価されたことによって、高木さんの中に、また書こうという決意が生まれた。その意味では、この選者とテレビの企画は高木さんの『ガラスのうさぎ』を生み出した社会的要因と言ってもいいであろう。



### 「私の戦争体験」が生まれたきっかけ

いつか「戦争体験」を一冊の本にしたいと思いながら、ノートを書き溜めていた日々が続いていた。その書き溜めたノートを翌年の3月10日の両親と妹たちの33回忌の供養にするので、小さな本にして配りたいと考えていた。夫が結婚20周年記念に贈ってくれるという指輪を断り、その費用でこの冊子を印刷したいとお願いしたら、夫は快く賛成してくれた。

高木さんは文章の勉強をするためのサークル同人誌『たおきん』に参加していた。文芸評論家の遠丸立が参加者たちの批評しながら、3ヵ月に1回、合評会を行っていた。そのような同人誌に参加しながら、戦争体験について思い出しながら、ノートに書き留めていった日々の中で一つの「事件」が起こった。その時まで子どもには戦争とはどのようなものかを話していたが、そんな息子が戦争ドラマに夢中だったことにショックを受けた。

ある時、夕飯の支度をしているわたしを小学校一年生だった淳一が、  
「お母さん、すごいよ」と興奮気味にテレビの前に連れていくのです。  
「これ、コンバットというの。今学校でも人気のドラマ。ドイツ軍のヘルメット、カッコいいでしょ」  
わたしは思わず、息子の頬をたたいてしまいました。淳一は泣きながら、  
「おかあさん、ごめんね。でも、これ、流行ってるんだよ」  
「ごめんね。お母さんもカッとなってしまっ——」  
わたしは淳一を抱きしめました（2007年：157頁）。

日頃、戦争の現実の悲惨をよく話していた息子でさえ、あの戦争の現実を理解できないものだと思います。「その想像を超えた恐ろしさ、悲しさ、惨めさを知ってほしいと思い、このとき、冊子を書く決心をしました」とその事件をきっかけに親たちへの供養のためだけではなく、子どもたちに伝えたいという「想い」が高まり、冊子を書く決意を強くしていった。息子のこの「事件」は、戦争体験を書き溜めていた10年以上の歳月にきっかけを与えた象徴的な出来事であった。

そしてまた、「戦争体験」を書くのに、同人誌『たきおん』での書く実践をする人々との交流と指導者であった講師の役割は無視できないものである。高木さんは一年間一作品も提出していなかった。そして、初めて「黒カバン」という作品を提出したが、指導者である遠丸が「あの前後があるでしょう。頑張って書きなさい。高木さんなら書けるよ」と言ってくれた。そのことを「うれしく」思い、冊子を作って、法事の時に配れるという自信を得た。それから、それまで書き溜めていたノートを文章にしながら、時代背景を書き込もうと、図書館にも通うようになった。

そのようにして完成した「私の戦争体験」を知人、知人の子ども、また、東京都の図書館だけでなく、養護施設や母子寮、いろいろお世話になった二宮町、松戸市、藤沢市、埼玉県布沼町（夫の実家のある町）など、縁があったところの図書館に寄贈した。この時の高木さんの「私の戦争体験」への「想い」は、強烈なものであったことは想像がつく。自分史作品を書いて、縁ある人々に配ることは一般的であるが、東京都の図書館を含むさまざまな図書館への寄贈したのは、高木さんの「想い」の強さと戦争を子どもたちに「語り

継ぎたい」という「想い」でもあった。さらにそれは、1962 年に出会った選者の先生たちへの約束でもあった。もちろん、内容が感動的でインパクトがある内容であったから、この冊子が注目を受ける結果になったのではあるが、都庁で副知事と広報課の松尾さんに「私の戦争体験」を手渡した時にいた都庁詰めの記者たちの役割は無視できないであろう。地方版に自分史作品が取り上げられ話題になるのは、まさに、新聞記者が取材し、記事に書いたからである。

### 『ガラスのうさぎ』の誕生

具体的な出版社への紹介は、「戦争体験」を語り継ぎ運動をやっていた前述の早乙女さんであった。高木さんは、東京大空襲の実態を知りたいと思い、そのことに関する本などを読んでいた。そんな時に、1971 年に出版された『東京大空襲』を手に入れ夢中に読み、自分がよく知る両国付近のことなども書いてあり、涙し感動した。この日以来、早乙女さんの名前を覚えていて、「私の戦争体験」を書いて、「謹呈」の文字を入れて、自宅に送った。そして、「私の戦争体験」を受け取った早乙女さんは、高木さんに手紙を書いてくれた。

……よくがんばりましたね。いまさらながら、あの戦争のキズの深さに、新たな怒りがこみあげてきました。この本をもっともっと大勢の人に読んでもらうために、どこかの出版社を紹介しますから、児童書としてもう一度書きませんか……（2000 年：187-188 頁）

という励ましのことばを受け取り、具体的に出版社を紹介してもらったのであった。その結果、金の星社から具体的に出版する話が来た。ここでみられるように、「戦争体験」を語り継ぐ人々の関係は重要である。もし早乙女さんがすでに「戦争体験」の語り継ぎ運動をしていなかったら、高木さんも早乙女さんに本を贈ることもなかったし、出版社を紹介されることもなかったであろう。もちろん、それ以上に、「私の戦争体験」への「想い」が強い高木さんであったので、見知らぬ作家に自分の本を贈るという行動に出て、早乙女さんとの関係を確立した。高木さん自身の「想い」の強さがその出発点としてあったのは、重要なことではある。

出版社が決まっても、本として出版するための書き直しには思っていた以上の困難さがあり、時間もかかった。その困難な作業を支えてくれたのは、亡き両親、妹たちであった。

書けなくなると、自転車に乗ってお墓に行きました。墓前で手を合わせていると、父や母、妹たちの声が聞こえてくるのです。

「書こうと志を立てたのだ。しっかりとやり通しなさい」と父。

「敏子ならできるわよ。仏さまもきっと見守ってくださるわ」と母の声。

「お姉ちゃん、頑張って」言ってくれるのは、妹たちでした。

そうなんです、母や妹たち、それから何万という人たちが焼夷弾で焼き殺され、骨に一片さえ残っていないのです。その人たちは何も語れない。苦しくても、難しくても、わたしは書かなければならないのでした（2007 年：166 頁）。

亡き家族からの励ましを受けながら、「戦災横死」で亡くなった人々のためにも書かなければならないと「戦争体験」を語り継ぐことに使命感を持ち、書き続ける努力をした高木さんであった。

亡き家族同様に励ましをしてくれたのは、読書サークルの人々であった。2週間に一度参加していた読書会「互葉会」（主婦たちが集まって読書会をする調布のグループ）では、高木さんが「私の戦争体験」を本として出版するということが話題になることがあったであろう。その時、長い間一緒に読書会をやってきたメンバーはお互いに励ましあう形で、それぞれの読書体験、書いたものを相互に読みあっていただろうことは想像できる。9ヶ月後、テレビ局に投稿した「花火がこわい」を書いてから15年目に『ガラスのうさぎ』が出版された。

### 『ガラスのうさぎ』の展開と「戦争体験」の語り継ぎ

『ガラスのうさぎ』はさまざまなメディアで話題になり、世の中に広がっていった。

出版した数ヶ月後の1978年2月4日に児童文学者が共同通信社の「こどもの本の紹介」にこの本のことを書き、この本は、2月7日には、読売新聞の「編集手帳」また、3月10日には朝日新聞の「天声人語」、さらに、毎日新聞の「余禄」でも取り上げられた。三大新聞社が取り上げたことにより、全国各地で話題になったという。そして、その年に、「青年読書感想文全国コンクール課題図書」に選ばれ、5月5日には、厚生省児童福祉文化奨励賞を授与されることになった。また、1979年には、日本ジャーナリスト会議奨励賞を8月15日に授与式に招待され、授与式で挨拶をしている。

『ガラスのうさぎ』が話題になったことで、講演会にも講師として呼ばれ始めた。最初の経験は、すでに直接電話して面識のあった早乙女さんからの1978年の3月10日の空襲記念日に講演をしてくれるようにとの依頼によるものであった。与えられた時間は20分であったが、母や妹たちが大空襲を逃げ惑う姿を思い浮かべ、涙があふれ声にならないままに、初めての講演を経験した。その後、さまざまなところから講演の申し込みがあり、30年間で1000回の講演会を越え、息子から「お母さんの講演は平和巡礼だね」といわれるほど行った。

『ガラスのうさぎ』はさらに新聞を越えたメディアの注目を受けることになる。国際政治学者の國弘氏が、日本テレビの朝の長寿番組である「ズームイン!!朝」で『ガラスのうさぎ』を感動して読んだことを述べ、その解説を加えてくれた。視聴率の高い番組だけにその影響力は大きいものであった。そして、1979年には映画化され、1980年にNHKの銀河テレビ小説で放映されることになった。

『ガラスのうさぎ』は世界各国語に翻訳されると同時に、子供たちに親しまれるようにアニメ化され、さらに広い人々に「戦争体験」の語り継ぎの役割を果たしている。現在、9ヶ国語に翻訳がされている。1983年のドイツ語、英語、タイ語、マラティー語、ベンガル語、中国語、スペイン語、ハンガリー語、ポルトガル語で出版されている。また、2004年にはアニメ化され、『ガラスのうさぎ』アニメ版が出版されている。

### 3.2 『あの日夕焼け 母さんたちの戦争』の鈴木政子さん

鈴木政子さんもまた、引揚げ体験を自分史として『あの日夕焼け 母さんの太平洋戦争』を子どもの視点から書いて、子どもたちに「戦争体験」を語り継いでいる人物である。鈴木さんは、太平洋戦争の敗戦時、中国東部の遼寧省黒山県にいて、小学校五年生、10歳の夏に敗戦を迎えた。その日から敗戦国民としての生活が始まり、8月30日にソ連兵を先頭に暴民に襲われ、その後3ヶ月間の収容生活を経験した。その後、収容所を脱出し、日本人がたくさん集結していた錦州にたどり着いた。その地での自活の生活は厳しく、子どもの鈴木さんも懸命に働いた。しかし、昭和21年5月、日本に帰った時には幼い弟と妹たちを失い、9人だった家族が5人になっていた。10歳の鈴木さんにとっては、この体験は衝撃的なもので、帰国してから、その体験をだれにも話そうとはしなかったし、思い出すのも嫌なものとして日々を送っていた。この体験は、1度だけ大学時代に短な童話のようなものにしたこと以外、書くはおろか、だれにも話すことはなかった。

しかし、長男が当時の自分の年齢に、「お母さんは、ぼくぐらいのときに、どこに住んでいたの?」と問いかけてきた時に、学生時代に書いていた「あのときのこと」を子どもと子どもの学校のクラスに読んでもらいたいと思い、担任の先生にあずけたことによってこの「戦争体験」を思い出したのが、書くことになったきっかけであった。夫にさえ言わなかった「戦争体験」について書いたものに対しての40人の子どもたちの率直な意見を読んだ時、「たとえ、心の傷の痛みに泣きながらも、自分が体験した『戦争』を、語り続けていかねば、と思えるようになりました」と、「戦争体験」を語りつぐ決意をふり返り思い出している。そして、この「戦争体験」を書くことは、亡き弟に対する贖罪の気持ちも大きかった、という。ジフテリアに感染し、もう余命いくばくもないと言われていた弟に対して言うてはいけないことを言ってしまったという思いがある。「もう姉ちゃんは働けない。みっちゃん（弟）が病気になるからみんなが苦しむのよ。みっちゃんなんか早くしんじまえばいいんだ。そうしたらみんながたすかるんだから」と。書くことによってその贖罪への道が終ったわけではないが、亡くなった弟たちへの「供養」として、この本を書いた。この本を書くことで、自分の生き方の「原点」を見出すことになったとふり返る。

#### 『あの日夕焼け 母さんの太平洋戦争』の出版された契機

鈴木さんは子どもの感想文を読み、「思い出すのはつらいから話さない」という態度を恥じた。そして、その頃に、色川大吉著の『ある昭和史——自分史の試み——』を注文した客と話をし、橋本義夫氏の「ふだん記運動」を知った。その運動に共感し、五人の仲間と「ふだんぎ茅ヶ崎グループ」をつくった。1977年12月に、30頁の創刊号を出版した。仲間も増え、二号に鈴木さんは「せんそうってかっこういいもんじゃないんだよ」という題で30枚ほどの作品を書いた。その作品に対して、50通ほどの感想文をもらった。その中の一人で、引揚者の坂本さんからは長い電話をもらい、一冊の本を作るべきだといってもらった。さらに、鈴木さんが若い時に編集者をしていた時の上司であった、この本の出版先の社長である下野博さんにも、執筆を強く勧められた。文章に自信もなく、忙しい自分に書けるだろうかと不安があったし、豊かになった今から考えれば夢のような飢餓状態は理解されるのだろうか、という不安もあった。

そのように迷っていた時に、「書くことの意義」「自分史の意義」について二人の大学教授の話を聞く機会があった。その話を聞き、「書くことは自分を確認することであり、自己改革につながるということ。自分史を書くことは、底辺の庶民史から郷土史、日本史、世界史、人類史にまでつながるのだ、という論理が納得できた」（1987年：195-196頁）。投稿した文章審査で選ばれ、沖縄旅行する機会が与えられた。鈴木さんは、沖縄の最後の激戦地になった「摩文仁丘」を訪ね、慰霊碑が建つ場所から海を眺め、その先に10歳までいた中国があることを思い、異常な光景に出会った。その時の光景を鈴木さんは次のように描写している。

「ねえちゃん」

「政ちゃん」

中国で亡くなった人たち、弟も妹もいっしょになって、波に乗ってわたしの方に駆け寄って来るではないか。さざ波の全部が人に見えてしまうのだ。

わたしの身体は動かなくなった。

「あの人たちの死のうえに、わたしが今いきている」日本の繁栄も、たくさんの人たちが流した血の結晶によって支えられているんだ。いろいろな『生』がある。いろいろな『死』があった。日本人同胞からも中国人からも多くの愛をもらった。

あの時の『わたしの戦争』を書いて置かなければ、死んでも死にきれない。わたし自身のために書かなければ。あの人たちの魂にこたえるためにも——」まばゆく光る青い海を見ながら、わたしは心に決した（1987年：196-197頁）。

書くという決心は、自分自身のためでもあるし、亡くなった人々のための「哀悼」への「想い」だった。

一冊の本を書く決心をして、鈴木さんは歴史を学ぶことから始めた。そして、日中韓の15年戦争の事実を真剣に考えた。その時まで被害者意識のみが強く、「ソ連兵にやられた。中国人にやられた」としか思っていなかったが、歴史を調べて、日本兵が中国人にどのようなことをしたのかを文献、写真から学び、「やったのは日本のほうだ」ということを知った。そして、どう謝罪してもしきれないようなことをしたと学んだ。文献だけでなく、「残留孤児」の会などにも出かけていって、さらに知らなかった「証言」を聞き「耳も目もふさぐようにして、自己本位に生きてきた30数年間を恥ずかしいと思った」。その後、満洲の収容所で一緒だった人々とも話をする機会を持ち、当時のことを思い出した。さらに、いろいろな人々が書いていた引揚記を苦しみながら読んだが、その体験について書けるだけでも幸せだと思い、書き始めた。

実際に書き始めて、書いた文章を読んでもくれる人物にも出会えた。「同じ想いを持つひとりの仲間」として文章を丁寧に読んでもらうことができ、勇気付けられた。さらに、その原稿を出版する予定の社長にも実際に赤い付箋を入れて読んでもらったりしながら、書き進めた。児童書として出版するために、中国生活を体験した画家にも挿絵を描いてもらって、書き始めてから四年経て1980年に『あの日夕焼け　母さんの太平洋戦争』を出版した。

本を書いてみて、「自分の生きている原点を探りあてたからだ。書かなかったらわから



ずにしまっただろう、このかけがえのないことが大切に思えた」と書き、「ふだん記」の橋本氏から学んだ自分史を書くことの意味を自ら実感した。本を書いたのは、満州で亡くなった弟や妹たちへの「追悼」の「想い」だった。と同時に「死者である彼らとともに生きてきた」35年間という認識に立ち、鈴木さんは、彼らの「声」に励まされながら、前に歩く決心をした日であった。

その後、鈴木さんは『自分史——それぞれの書き方とまとめ方』を1987年に出版し、自分史講座などで、自分史の書き方の指導をしながら、書き始める人々との出会いを楽しみながら、生きている。

### まとめ：「戦争体験」が語り継がれ、書かれる意味

高木敏子さんの『ガラスのうさぎ』と同じように、肉親を東京大空襲で亡くし、疎開生活で苦しんだことを故落語家林家三平の妻、海老名香葉子さんも書いている。『うしろの正面だあれ』と『半分のさつまいも』の2冊の「戦争体験」である自分史は、小学5年生の時の11歳に、学童疎開中に東京大空襲で肉親6人を失い、生きるための「戦い」をしたという「戦争体験」を中心に戦争の悲惨さを語り継ぐ本である。

また、鈴木政子さんの『あの日夕焼け 母さんの太平洋戦争』と同じように、大陸からの引揚げてきた体験を女優小林千登勢さんも書いている。終戦の翌年昭和21年に小林さんの一家は日本人の79人の仲間と一緒に北朝鮮の平壤を脱出し、朝鮮半島を南北に分断している38度線をめざして進んだ。小林さんの『お星さまのレール』は、その引揚げの逃避行までの幼い頃の体験と帰国までの「戦争体験」を9歳の子どもの目線で語り継ぐものである。

経験したことのすべては、必ずしも、すぐに書かれるものではない。鈴木さんは35年、高木さんも32年という月日を経た後、「戦争体験」を書くことができた。「戦争体験」は自分史として書かれるまで封印され、語られことはなかった。しかし、彼らは、その体験を忘れたわけではない。その体験に関わった今は亡き人々とともに生きているのである。高木さんも鈴木さんも亡き肉親のための「哀悼」の「想い」で、忘れ去りたいと封印していたその体験を書かざるを得なかった。書くことで、「亡くなった人々が生きていた証」をしめしたかったのであろう。今は亡き肉親とともに生きてきたという想いを示すことであるかもしれない。

「戦争体験」という歴史的事件との関わりとは関係なく、亡くした人へ想いを寄せることは、生き残った人の生き方であろう。自らも親友の死に直面し、その記憶にこだわりながら、親しい人の「死」の意味について研究しているやまだ（2007年）は、生き残った人々は死者とともに生き、死者の意志を継ぎ、死んでいった者の願いを自主的に受け継ぐが、それは死者のためでありながら、自分の生きる力となっていると論じている。そして、その人の意志を引き継ぐ形で、その喪失を克服していく側面があると指摘する。そして、それは、「死者が見守る」「死者が同行する」物語とみなされるものであり、それぞれの個人の個人的な喪失感の克服というよりは、「不在の他者と同行する物語」として、文化の物語として受け継がれたものである。「死者を葬る、忘れる」ではなく、逆に「死者とともに生きる」決心をすることによって生きる力の生成しようとする試みであると、やまだは考え

る。

やまだの分析枠組みに従い「戦争体験」を語り継ぐ人々の行為を解釈するならば、勝元さん、高木さん、鈴木さんも、亡くなった友だちや肉親の「声」を聞き、「遺志」を受け継ぐために「戦争体験」の語り継いでいるといえる。

最後に「戦争体験」を書くことの意味について2点指摘する。

まず、「戦争体験」を書くには相当の時間が必要であるという点である。「戦争体験」は嫌な体験、だれに話してもわかってもらえない体験だと思い、その体験の記憶に封印をして生きている人々が多い。しかし、自分史として、その体験を書き始めた人々は、子どもの時の「忘れえぬ体験」を伝えたいと思うのである。そこにこそ、書くことで「戦争体験」を語り継ぐという行為が生まれるのである。

次に、一人の人が「戦争体験」を書くことは個別的ではあるが、社会的要因が働いている。鈴木さんにとって、「ふだん記」運動や綴り方運動に見られる、庶民が書くことで自らの体験、取り巻く社会、歴史を理解できる手段であるという考えに出会い、なんらかの形でそのような運動を推進していた人々との出会いがあった。高木さんにも同じような同人雑誌サークルがあった。そして、早乙女さんの場合も、製糸工場の女子工員に体験を書く実践をさせていた山本茂美に、「戦争体験」を中心とした自分の生い立ちについて「書け、書け」と言われなかったら、本として出版することなどありえなかったであろう。

## 参考文献

- 海老名香葉子 1990 年『うしろの正面だあれ』フォア文庫  
1997 年『半分のさつまいも』くもん出版
- 小林多寿子 1997 年『物語られる「人生」』学陽書房
- 小林千登勢 1984 年『お星さまのレール』フォア文庫
- 早乙女勝元 1981 年(1961年初版)『下町の故郷』理論社  
1989 年「素材は身近にいっぱい」書く人の会編  
『自分史講座(2)——自分史のコツとノウハウ』桐書房：92-108 頁  
2007 年(1971年初版)『東京大空襲——昭和 20 年 3 月 10 日の記録——』岩波新書  
1998 年『戦争を語りつぐ——女たちの証言——』岩波新書  
2003 年『語りつぐ戦争 15 人の伝言』河出書房新社  
2003 年『戦争と子どもたち』河出書房新社  
2004 年『早乙女勝元 炎の夜の隅田川レクイエム』日本図書センター  
2005 年『忘れないあのこと、戦争——残しておきたいわたしの戦争体験』文芸社
- 鈴木政子 1980 年『あの日夕焼け 母さんの太平洋戦争』立風書房  
1986 年『自分史 それぞれの書き方とまとめ方』日本エディタースクール  
1987 年『満州そして私の無言の旅』立風書房
- 高木敏子 2000 年『ガラスのうさぎ』金の星社  
2000 年『めぐりあい——ガラスのうさぎと私』金の星社  
2001 年『もういや「おくにのために」には——ガラスのうさぎを溶かさないで』  
岩波書店 岩波ブックレット No. 65  
2007 年『ラストメッセージ——ガラスのうさぎとともに生きて』メディアパル

## 塚 田 守

- |             |  |
|-------------|--|
| 野上 元        | 2006 年『戦争体験の社会学——「兵士」という文体』弘文堂                                   |
|             | 2008 年「第 1 章 戦後社会と二つの戦争体験」浜日出夫編『戦後に日本における市民意識の形成』慶應義塾大学出版：1-21 頁 |
| 森川寿美子・早乙女勝元 | 2005 年『東京大空襲 60 年 母の記録 敦子よ涼子よ輝一よ』岩波書店 岩波ブックレット No. 648           |
| やまだようこ      | 2007 年『喪失の語り 生成のライフストーリー』新曜社                                     |
| 吉澤輝夫        | 1995 年「データでみる自分史」吉澤輝夫編『現代のエスプリ』自分史 至文堂：168-174 頁                 |